



オリカルクムの記憶

六 始祖との邂逅

峯村
明

オリカルクムの記憶 6

登場人物

始祖との邂逅

047.

048.

049.

050.

051.

052.

053.

054.

055.

056.

あとがき

奥付

登場人物

竜門渕 めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者 15歳
竜門渕 遠野	竜門渕家の現在の当主 めるのの曾祖母
河合 保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ 14歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A. V. ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ / 源三	竜門渕家の使用人
星名 千助	アマチュアの鉱物学者

始祖との邂逅

047.

かんかんかんかんかんかんかんかんか……ん……か……ん……

(なんじゃ……騒々しい……) 遠野は寢床のなかでもぞもぞと寝返りを打ち、不機嫌にうなった。彼女の体内時計ではまだ明け方の四時ころである。もうひとねむりもふたねむりもできるはずだ。

昨夜は来客があった。心やすい相手であったので、十時近くまで話し込み、ついには相手方の家の若い衆が心配して提灯片手に迎えにやってきた。暖かい月夜の道を、相手方は機嫌よく帰って行った。めるのがなにやら話したそうにしていたが、遠野の大あくびをみて「おやすみなさいませ」と部屋へ引き取っていき、長話の満足と疲れで自らも夜具に入ったとたん、すたとん気持ちよく眠りに落ちてしまったのだった。

……それにしても……かんかん……かんかん……

(……なんじゃらほい)

(おばあさま！)

めるのの声が聞こえたような気がする。しかしその声は両手で耳を覆ったように遠い。

(おばあさま！ ——おばあさま！！)

からりとふすまが開いた。

「——めるのか？」

長い髪を無造作にうなじで束ねたモンペ姿の孫娘は、祖母の顔をみるなり、膝をつき、畳の上を四つん這いですり寄ってきた。

「おばあさま！ 起きてください！ たいへんなんです！」

「——どしたんじゃい」

「大雨です！ 夜中からものすごい雨が！」

「雨——」

「ええ！ 湖の水が増して！ 溢れそうなの！ 低い所に住んでる人は高台に避難するよう、消防団の人が今、火の見やぐらに上がって半鐘を叩いてます！！」

めるのが大声を張り上げている。そうしないと雨の音で聞こえない。水の音はなにもかもかき消してしまう。なのに半鐘の音を聞き分けるとは、さすがワシじゃ、と自画自賛していると、「早く！」と腕をつかまれた。

「ナニするんじゃ」

「ナニって、私たちも避難しなくちゃ！ さあ早く！」

遠野は夜具のうえでしゃきっと背筋を伸ばし、息を吸い込んで、一喝した。「馬鹿者！！」

「は——」

「水神・竜門渕が雨だの洪水だのにおろおろして、なんとするか！！ だいたいここは高台じゃ！ 避難するならここじゃ！」

「あ——」

「落ち着けい、めるの！ しっかりせんかい！ 低地の住民たちが押し掛けてくるぞい！ 別棟の戸を開けて、源三夫婦にはすまんがちょっとつめてもらって、そうすれば二、三百人入れるはずじゃ！ さあ！ しゃきっとせい！！」

それは、当年にとって齢七十七の遠野がかつて経験したことのない、凄まじい集中豪雨だった。

048.

しゃきつとしろと言われても、恐ろしいものは恐ろしい。体がすくんで動かない。しゃきつとしようにも体がいうことを聞かない。それでも遠野の一喝はめるのを奮い立たせた。

竜門渚家の祈祷は湖に向かって行われる。湖に向かって大きく開かれた板の間は吹き込む雨と風ですでに三寸も水に浸かっている。その中でめるのはひたすら心を落ち着け、母なる龍神に触れようとする。

いかに、とめるのは問う。

あなたを悩ませるものは、いかに
教えてください

あなたの苦しみは私の苦しみ

あなたの悲しみは私の悲しみ

私に分け、与えたまえ

私はあなた

あなたは私

私たちはともに苦しみ、悲しむ者

はるかな昔から

私たちはともに苦しみ、悲しむ者だった

時を経てもそれはかわらない

龍の神よ

あなたの後継者はここにいる

私はここにいる

049.

使われなくなって久しい旧家の別棟を次々と開放し、おシゲは町の人々を迎え入れた。湖を周回する道とは別に、周囲の山に沿った道が竜門渚の屋敷と町の間にある。緩い山の斜面は畑や田んぼで、山沿いの道は主に農耕用のものだ。低地で湖の氾濫を恐れた人々がこの道を使って竜門渚家に避難してきたのだった。

畑や田んぼで開けているとはいえ、街灯ひとつない農耕用の簡素な道は真っ暗、足元はぬかるみすべり、風雨に吹き飛ばされまいと全身でふんばり、同行した家人や友人は大丈夫かと声をかけあう。その声も風雨が持っていってしまう。生きた心地もなく、這うように旧家の裏門をくぐったのだった。

雨風をしのげる場所にたどり着いた町民らは、みな、ほっと胸をなでおろしていた。

「なんてこったろう！！」みな口々にそう言いあった。「ついこないだ、えらい雷が落ちたばかりだ！ あんな雷もこんな大雨も、生まれて初めてだわ！！」

「えらいこっちゃ……」「なに、怒っておられるだや」「……誰が？」「龍神さませ」「龍神さまが……」「龍神さま……」「ちょっとちょっと皆の衆、遠野様とめるの様がいっしょうけんめいに龍神さまなだめておられるに！！」「そうさ、雨風防いでくれてるのは竜門渚のお屋敷だぜ」（おらな、昨日、見ちまっただ）（……）（なにを）（このおじょうさまがな）（小出しにするんじゃねえわ！ はやく云え！）（やどやのせがれとだな、小舟にのって、小島でいちゃいちゃしとった）（ええー、それで龍神さまが？）（はああ）居合わせた人々は顔を見合せて、うなずきあった。この前代未聞の大嵐は龍神の怒りなのだ、と。

「ちょっと！！」憤然と抗議の声をあげたのはおシゲだった。「よしとくれ！ ここでそんな話！！」

(そうは言っても、さあ……) (おシゲさんにやわるいけど、見ちまったひとがいるんだし) (ほうせ) (そういや、『かわいや』の衆がひとりもおらん、客の外国人もいねえわ) (ほんとだ)

「消防団の若い衆が水門を見に行ったんだ！ うちの亭主もいっしょにね！ 水門を開けた方がいいって言ってきたのは『かわいや』のラウレンスせんせいだよ！！」

(そんな、よそもんのいうことを……)

「ここで御託ならべてるより、やれることやったほうがいいよ！ あたしはそう思うよ！！」おシゲは啖呵を切って胸を張った。

050.

めるのは時々、おかしい夢を見る。

夜、らしいのだが、雲が低く立ち込めているのがわかる。雲があるために、夜なのに薄明るいらしい。その薄明の中を彼女は泥をかき分けるように進んでいる。何かから逃れようと、気持ちの悪い動悸を打ちながら、いやな匂いのする泥を両手でかき分けているのだ。底なし沼ではなく、かろうじて足が硬いものを踏んでいる。しかしそれはひらたいものではなく、ごつごつぬるぬるしている。考えたくもないがおそらく——。薄明のおかげでその泥沼が見渡す限り続いているのがわかる。

なぜこんなことになったのか。わけがあったような気がする。否定され、後ろ指をさされ、最後に裏切られた。原因となったものは——彼女自身が生み出したものだったが、それがなぜそんな仕打ちを受けることになるのか、彼女にはわからなかった。自尊心は踏みにじられ、裂かれ、ずたずたになった。そうなってまで、いまだに追っ手がいた。追っ手はたぶん、彼女を追い詰めることそのことが目的だった。

もうだめだと彼女は思った。生き物のようにまとわりついて手足の自由を奪い、口も鼻も塞ごうとする泥は、形のある絶望だった。薄明の中、際限のない泥沼でのたうつ自分自身を俯瞰した彼女は、その惨めさに泣くのだ。

泣きながら目覚める。泥沼の光景は消えてしまい、記憶にも残らないが、筆舌にしがたい惨めさだけがある。めるの自身の魂の奥深くに刻まれた記憶であり、傷なのかもしれない。夢の辛さに耐えかねためるのに打ち明けられた遠野は、そんな風に解釈した。その夢はいつも同じ光景で始まり、胸もつぶれる悲嘆に終わった。異なる、あるいは、

似たバージョンというものがなかった。

051.

しかし今。未明の豪雨の中、母なる祖に重なろうとかつてないほど沈潜しためるのは、まさにその夢の場面に遭遇していた。

祈っていたはずなのに。おかしい、とめるのは思った。

祈りながら眠ってしまったのかしら。激しい集中の末に緊張に堪えられず失神してしまったのかもしれない。いけない、とめるのは思った。こんな場所で眠ったり失神したりなどできない。次の瞬間に泥にのまれてしまう。彼女は首まで泥に浸かっていた。目を覚ましていなければ。確実に死ぬ。でも――

生きていてなんになるのだろう。私にはなにもない。どうということのない日常も、思うままに作り上げた音楽も、未来の希望も。誇りも。友も。家族も。なにもない。なにもかも失くしてしまった。この世界にいる理由はなにもない。ならば、去ろう。と、つぶやいた時だった。

「おい！」と男の声。「おい！ あんた、しっかりしろ！」

――だれ？ 源三さん？

「あんた、こんな泥沼の真ん中でなにやってんだ、どこから来たんだ、まあ詮索はあとでいいや、あそこでワニがこっちを見てるから」

ワニ？ ワニはきらい

「おれだっけきらいでい！ 飛ぶぜ！ しっかりつかまれ！！」

052.

こんな場面は初めてだわと、めるのは思った。それも、泥沼から助け出してくれるのが、保ノ助さんだなんて。ぼんやりとそんなことを考える。最悪の悪夢の中の、もはやこれまでというところで、駆けつけてくれたのが保ノ助とは。

泥の平原を抜け、澄んだ湧水があふれる泉で汚れを落とし、全身を洗い浄めためるのは、水面に映る自分の姿に驚愕する。

——これはだれ？

あなたの苦しみは私の苦しみ
あなたの悲しみは私の悲しみ
私に分け、与えたまえ
私はあなた
あなたは私
私たちはともに苦しみ、悲しむ者
はるかな昔から
私たちはともに苦しみ、悲しむ者だった
時を経てもそれはかわらない
龍の神よ——

ふいにその名がめるのの口から洩れた。——ミツハさん

水面に映るその人が応えた。

——ようやく 逢えましたね めるの

053.

保ノ助は自分の素性を明かしたが、めるのには彼が属する『世界中立評議会』というものの意味がよくわからなかった。少なくとも、宿屋のせがれではないようだった。

泉のほとりで火を焚き、獲った魚を焼いて食べさせてくれた。彼は『保ノ助』という名ではなかったが、この人は保ノ助さんだわ、とめるのは思った。彼の表情、物言いは保ノ助そのものだった。

(だから、だったのね) めるのはつぶやく。(信じられる人はひとりもいないと思ってた。なのに、命を救われたからといって、見ず知らずの、この人のいうことを信じたのは……)

ミツハは応える。(保ノ助が彼だったからなのか、それとも、彼が保ノ助だったからなのか。どちらでも同じこと。彼はあなたの苦難を黙って見ていられないのです。だから助けに行く。どんなに遠く離れていてもね)

(……どうして?)

(さあ)、というミツハの応答に、突き放すような冷たさはなかった。めるのは、穏やかな戸惑いのようなものを感じた。(彼自身、それはわからないでしょう)

「追っ手を欺くためだ」と、保ノ助の勧めで『ミツハ』と名乗ることになっためるのは、ミツハの肉体を借りて過ごした日々を追探検する。

目もくらむ心地でめるのは曾祖母、遠野と語り合っている。遠野はある一族とつきあいがあった。彼女の娘が結ばれた相手は、ホシナ族の族長だったのだ。

もしもめるのが星名千介と面識があったなら、彼がまさに『そのひと』だったと知っ

ただらう。

ホシナ族は時の統治者から手厚い保護を受けていた。この地から豊富に産出する黒曜石を加工して石器を作り、動物を狩り、同時にうると菜という植物を栽培していたからだ。当時植物を主食としていた人々にとって年々下がっていく気温は、食糧の確保を難しくするものだった。統治者は動物食へ切り替えるのと並行して、動物食の弊害を抑えるための植物、うると菜を育てた。神仙のごとき統治者らの食糧であるうると菜は地味をきびじく選び、栽培は非常に難しかった。統治者はその両方の任をホシナ族に与えたのである。

しかし時は移り変わる。

手厚い保護を受けていたゆえに、ホシナ族は統治者の後継を巡る宮廷内の陰謀に巻き込まれた。陰謀者はホシナ族を使って時の統治者に圧力をかけたのである。

結果、正規軍がホシナ族制圧に出動し、逆賊となったホシナ族を守れないと悟った統治者は、ホシナ族に自身の航空船を与え、国外へ逃亡させたのだった。

054.

政府軍に続いてあらたな一団がうると菜の畑に手際よく乗り込んできて占拠した。

遠野の族は石器製作ともうると菜栽培とも関係していなかったが、ホシナ族と姻戚関係にあること、また居住地が近いために、弊害が及ぶことを懸念した統治者は彼女たちをも避難させた。

遠野の娘オマキはホシナとの間に一子をもうけていた。マミヤというその娘はある時山中で行方知れずとなり、オマキも政府の正規軍に追われるという降ってわいた災難。遠野の心痛は深く、めるのは遠野と行動を共にすることを選んだのだった。

「おばあさまとはそんなご縁があったのね——」

(ホシナ族は身軽な一族でしたが、トーノさまたち……トーノ族としておきましょう……は土地に根づくひとたちで、生きていくために新しい土地が必要でした。そのため土地が、用意されていました)

ミツハのつぶやきにはもの思わし気な色が滲んでいた。

「用意されていた、とは……？」

(政府内の一部で、ホシナ族討伐はひそかに、慎重に進められていたようです。そのことに気づいたひとがいたのです。けれど、改めて問い質す、あるいは異を唱える、そういったことができない立場にいたひと。その方がトーノ族の新しい居住地を用意し、政府軍到着の直前に住民を避難させたのです)

「それは——まさか、オ——」

言いかけためるのを、ミツハはまなざしを向けることで止め、わずかにうなずいてみせた。そしてまたもの思わし気につぶやくのだった。

(まつりごとにたずさわるとは、余人には計り知れぬ苦しみがあるということです……)

ホシナ族がこの地を去って、政府の内、また宮廷の内では様々な揉め事があった。ある者は退き、ある者は表に出た。そして体制が一変しつつあった頃。

(あれが起こったのです)

055.

数日前から妙な胸騒ぎがした。木々はざわめいて鳥が啼き、獣が暴れ、羽虫が群れをなして飛び立った。天変地異の前触れに自然はひじょうに敏感である。いやな動悸が治まらない。人々は目に見えて動揺している。政府の日読みは何事か察知しているだろうが、ミツハは今の日読みとはあいにく面識がなかった。

早苗が植わり、さわやかな初夏のある日の昼下がり、めるのはミツハとともにその光景を見た。

にわかにかき曇り、鈍い鉛色の雲が全天を覆った。ごろごろごろと気味の悪い音が鳴り渡り、雲の間をひっきりなしに稲妻が走る。家屋に逃げ帰った人々は頭を抱え、抱き合い、悲鳴をあげ、年長者に教えを乞うが答えられる者はひとりもない。

先般、水つ早町を吹き荒れた嵐とは一けたも二けたも規模が違った。まさにこの世の終わりのようだった。

そして空から氷が降って来た。大人のこぶしほどもある氷の塊がバラバラガラガラとこの世のものとも思われないと音をたてて激しく地面に降り注ぐ。人々は恐怖に凍りつき、総毛だってひれ伏した。簡素な造りの家屋は押しつぶされ、根づいたばかりの早苗は氷礫の下に埋まってしまった。

初夏の気候ならば、多少の雹など程なく融けてしまいそうなものだが、そうはいかなかった。空には雲が居座り、陽射しを遮り、冬のように冷たい風が吹きつけてきた。降り積もった雹は根雪のように凍りつき、食糧となるべき稲の苗は全滅、トーノ族は少しでも暖を求めて南へ移動するしかなくなった。

(南へ、湖の方へ、移動するよう助言して下さったのはスクナ様でした。湖に温かなお湯、温泉が湧いているのをご存知だったのです)

人々は湖周辺に集まって来たが、ごくわずかだった。スクナによると、此度の雹害、低温被害は列島全土に及ぶものだという。しかしミツハはスクナの不穏な様子から、事態はもっと深刻なのではないかと察する。

いったい、なぜ、こんなことに――

被害は甚大、多くの人命が奪われ、食糧を得る道は閉ざされた。気候は回復の気配も

なく、生き残った人々の意欲をくじくに十分だった。

中央政府も人材を失い、宮廷の内部紛争などという低次の争いどころではなくなっていた。

スクナは協力者と共に食糧調達に奔走したが、その途上で彼は恐ろしいことに気がついた。このくには前代未聞の自然災害によって滅びるのではないかと。

056.

星も月も見えなくなって久しい、ある晩。空中になにかが光っているのを誰かが見つけた。

(私はてっきり、蛍が飛んでいるのだと思いました。けれどもすぐに、違うと思いました。身も凍える寒さの中で、小さな蛍が飛べるわけがありません)

その小さな光は空中をゆっくりと降りてきた。飛ぶ力を失った蛍が最後の光をまたたかせながら落ちてくる、そんなあんばいだった。その光は――

ミツハは我を忘れて光を追った。金と緑が入り混じって輝く光は湖の冷たい水面に近づいていき、ゆっくりと着水する。薄氷の張った水のなかにミツハはバシャバシャと水しぶきをあげて踏み込んだ。

胸が早鐘を打っている。早く！ 早く！ 急がないと、沈んでしまう――！

首元まで水に浸かりながら、夢中で手を伸ばして、光をすくいあげる。つま先はすで

に水底に届いていない——

「おい！」と、頭上で男の声。「おい！ しっかりしろ！」

——だれ？ スクナさん？

「あんた、こんな氷水の真ん中でなにやってんだ、死んじまうぞ！！」

だいじょうぶ だいじょうぶよ

「なにやってんだ、気は確かか？ 飛ぶぜ！ しっかりつかまれ！！」

6・「始祖との邂逅」

7・「オリカルクムの記憶」へ続く

あとがき

前回のあとがきに出てきた『鯛のように奢ってしまったオオナムチ』、じつはすばらしい業績も残しています。

たくさんの食糧と種袋をかついで人々の間を歩き、穀物の育て方を教え、育てた。民を教化し養った。不順な天候で作物が実らないときには倉に蓄えた食物を配り、飢えさせないようにした。

（えびすさまが持っている）大槌は民の教化（つちかう）のための神器、座っている二つの俵は靈食としての俵であるとホツマツタエ9文にあります。

商売繁盛や豊作の神さまとはちょっとおもむきがちがいますね。

また記紀や古語拾遺には、民や家畜の病気治療にあたったことが記されていますし、各地の温泉神社に湯神として祀られています。こういったオオナムチの数々の業績に同行したのがスクナヒコナさまなのでした。

2024年11月1日

奥付

オリカルクムの記憶

6・始祖との邂逅

2024年11月1日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「NEO HIMEISM」](#)

[「素材good」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
